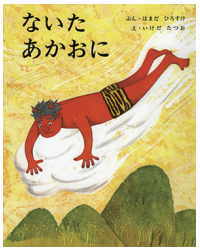
episode 19　二冊の『ないたあかおに』

投稿者　**渡会 三郎** さま（千葉県）



『ないたあかおに』
浜田廣介 作
池田達雄 絵
偕成社　1965年

早朝、妻が倒れ、救急車で病院に搬送されたときのことだ。
「タケシを頼むぞ」と、「一緒に行く！」と泣き叫ぶ次男を長男に託して、妻に付き添った。
様々な検査の結果が出揃うまで入院することになり、一旦帰宅してみると、兄弟が握り飯を頬張っていた。
「十二時過ぎても帰って来ないんだもの。僕は我慢出来たけど、腹減ってへたりこむタケシが可哀想で」と、
長男が健気なことを言う。
小学一年生が二つ下の幼稚園児のためにしたことは、冷や飯でデカ握りを握っただけではなかった。
「兄ちゃんが読んでくれた『ないたあかおに』に僕、泣いちゃった」と、次男が絵本を私に見せる。

メンタルな病気であったらしく、どこも「異常なし」のお墨付きをもらって退院してきた妻が、
デカ握りと絵本の話を聞いて、「偉かったね、二人ともちゃんとお留守番出来て」と子供達を抱き締める。
そのときの兄弟の誇らしげな照れ笑い――。

それから幾星霜。
長男宅を訪れたとき、ミウ（孫の名前）用の本棚に立てられた絵本の中に『ないた赤おに』を見つけた。
「ミウに読み聞かせながら、二倍ジーンとくるんだ。話の中身と、子供の頃の握り飯を思い出してヨ。
あの頃、読んだのと絵が違うけれど。」

『ないた赤おに』
浜田廣介 作
いもとようこ 絵
金の星社　2005年

「それなのに、躾に今流行りの『そんなことをすると鬼が出るよ』か？」と苦言を呈する爺に、
息子は首を横に振りこう答えた。
「やめた、やめた。『ないた赤おに』を知ってから、ミウは鬼を怖がらなくなったんだ」

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2020」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

日本のアンデルセンといえば…

人間と仲良くなりたい「赤おに」と、その願いを叶えてあげたい「青おに」が織りなす温かくも切ない物語『泣いた赤おに』は、日本のアンデルセンと称され、「ひろすけ童話」として今なお親しまれている童話作家・浜田廣介氏の代表作です。

最後に泣くのは「赤おに」だけでなく、読者自身が自己を重ねて涙するお話は、小学校の道徳資料として1962（昭和37）年に文部省が取り上げて以来、昭和40～60年代は道徳の授業に盛んに用いられ、令和の現在でも副読本に入っています。

また、2011年には教育出版の小学二年生国語科教科書に全文が掲載され、道徳教育の縛りから「読書指導」へ発展する位置づけにもなったことは、時代の流れも影響しているでしょう。

初出の「謎」が77年を経て解明された

「泣いた赤おに」がはじめて発表されたのは、雑誌『カシコイ二年小学生』（精文館）1933（昭和８）年８月号で、タイトルは「おにのさうだん」でした。初出の発行年が明らかになったのは、なんと2010（平成22）年秋のことです。それ以前にわかっていたのは、同誌が初出であることだけで、発行時期については諸説あり、タイトルは「鬼の涙」だと言われていました。

精文館創業者の遺族のもとに同誌が26冊現存することが平成22年秋に判明し、これに新見南吉童話が掲載されていたことで、新見南吉記念館が譲り受けて明らかになったのです。

「おにのさうだん」は、同誌の昭和８年８月号から10月号まで３回連載されており、それが後の「泣いた赤おに」の前半部に当たることが特定されたのです。

初出の翌年1934（昭和９）年７月には、浜田廣介自ら主宰した同人誌『童話童謡』第２号に「鬼の涙」と改題し、さらに本文も改稿して掲載します。そして、1937（昭和12）年６月、「泣いた赤おに」として登場したのが、自著『ひらかな教訓お伽噺 六の巻』（宏文堂）でした。

昔話のような『泣いた赤おに』

浜田廣介40歳のときに発表された「泣いた赤おに」は、初出から４年のうちに３度改題され、80歳の生涯を閉じるまでに、何度も細部が改編されながら、発表され続けました。そもそも浜田廣介氏といえば、頻繁に作品を改稿したことがよく知られた作家で、「泣いた赤おに」もその例に漏れなかったというわけです。

作者没後も同作の新刊絵本が発行され、教科書にも採用され続けている類まれな作品と言えるでしょう。最も新しい絵本は2016年に、つちだのぶこ氏の絵で、あすなろ書房より発行された作品です。実に初出から83年、ひろすけ没後43年が経過した最新刊です。

鬼の概念を変えた童話作家

浜田廣介氏は、「泣いた赤おに」を創作する少し前に高野山総本山金剛峯寺を参拝しており、偶然、宝物土用干しに遭遇し、鎌倉時代の運慶作の国宝、八大童子のひとり“恵喜童子（えきどうじ）”と出会うのです。この像が「知恵をめぐらし、その知恵をひとに与えて喜びとする童子」と知って、「この童子をかりて創作童話の中に新しい日本の鬼を生かして書いてみたかった」と晩年、述べています。

戦時中は「敵」の象徴として描かれ、昔話では「悪者」「怖くて恐ろしい」存在であった鬼を、「善い心の持ち主」に描き出したことは、日本において鬼の見方・概念を大きく変えたのです。

日本児童文学の成立と初期の隆盛を支えた浜田廣介氏は、鬼の文化史に転換点をもたらし、日本文化に大きな影響を与えた童話作家なのです。

文献

1）今泉岳雄：自分の物語として「泣いた赤おに」を読む，東北文教大学紀要（6），pp.1-15，2016.
2）浜田廣介 作，黒崎義介 絵：ないたあかおに（おはなしえほん⑫），フレーベル館，東京，1987.
3）新見南吉記念館：「泣いた赤おに」の初出誌，新見南吉記念館だより（159），新見南吉記念館，愛知，2012.